

日露戦争

はじめに 日露戦争とは

1904年（明治37）2月から翌年にかけて、満州・朝鮮の支配をめぐる戦われた日本とロシアの戦争。ロシアの南下政策に対して日本は英・米の支持の下に強硬政策をとり開戦。日本軍は旅順攻略・奉天会戦・日本海海戦で勝利を収めたが、軍事的・財政的に限界に達し、ロシアでは革命運動の激化などで早期戦争終結を望み、両国はアメリカ大統領ルーズベルトの勧告をいれて、1905年9月ポーツマスで講和条約を締結した。
(大辞林 第三版)

1, 日露の対立～ロシアは危険な隣人だったのか

1, 司馬遼太郎の日ロシア像

日本は、その歴史的段階として朝鮮を固執しなければならない。もしこれをすてれば、朝鮮どころか日本そのものもロシアに併呑されてしまうおそれがある。

2, 現代歴史学が描くロシア像

- ①和田春樹「ロシアは完全に受け身」「最初から消極的」「戦争をすることを望んでいなかった」
 - 1)興味薄のロシアと、ロシアに期待する朝鮮国王＝保護国化を要請
 - 2)朝鮮海峡の根拠地獲得に興味をもつロシア海軍と、警戒するイギリス
- ②伊藤之雄

皇帝ニコライ二世は日本との戦争を望んではおらず、日本の韓国における、ロシアの満州における利益を相互に承認しても良い、という満韓交換の立場に立っていた。

3, なぜ「危険なロシア」像が生まれたのか

- ①宿敵「イギリスの目」でロシアを見ていた日本
- ②「万国対峙」の象徴としてのロシア
- ③神経症化する国民 危機の象徴としてのシベリア鉄道、三国干渉

4, 日清戦争と三国干渉…日本の蛮行とロシアに接近する高宗

- ①「独立維持・改革援助・中立化」から、「保護国化」へ
- ②改革の強要⇒国王夫妻の反発
- ③三国干渉により国王夫妻の対抗姿勢たかまる。⇒改革停止へ
- ④閔妃殺害事件⇒高宗のロシアへの接近＝露館播遷へ
- ⑤ロシアは、日本と対立してまで朝鮮進出をめざしたのか＝朝鮮分割案を拒否

5, ロシア極東政策の変更…東清鉄道敷設・関東州租借と、満州占領

- ①露清密約(1896)…対清借款と東清鉄道敷設権。対日同盟の性格
- ②関東州(旅順・大連)の占領・租借(1898)⇒日本の反露意識の高まり
⇒ロシアの基本戦略＝旅順軍港への補給路確保に
 - 1)東清・南満州鉄道確保の重要性の高まり
⇒露朝国境の確保・義和団戦争における満州占領の引き金に
 - 2)海上ルートの確保⇒朝鮮海峡の海軍根拠地計画(馬山事件)
- ③義和団による東清鉄道攻撃⇒満州の軍事占領(1900)、撤兵の難航
- ④極東戦略の変更?…満州の支配?勢力付与?と日・英の妨害(撤兵交渉)。

6, 「大国」ロシアの宿命

- ①専制国家としての問題点…各分野が勝手に行動、皇帝個人の判断に左右される
- ②大国の宿命?おごり?＝外交方針変更の困難さ
 - 1)名目・きっかけ・見返りなしの満州撤兵は困難
 - 2)妥協案の提示(韓国占領の容認)を躊躇＝韓国への信義とのかかわり
- ③「新路線」の採用＝強力な軍力で日本の好戦論を抑えようとする。

④「大国」の過信＝日本軍のあせりや国民の開戦論を軽視

- 1)日本軍の攻撃の可能性を軽視、韓国占領のみと判断⇒皇帝は日本との妥協を最終的に決断したが。
- 2)シベリア鉄道への日本の危機感をつかみ切れない⇒日本陸軍＝全通後の勝利は不可能と判断
- 3)不意を突かれたロシア⇒国民の支持は弱く、準備も不十分

II、開戦～奇襲攻撃

1,開戦 1904年(明治37)年2月7～8日

作戦行動の開始 2月6日以降 韓国での軍事行動開始＝韓国の主権・中立侵害からはじまる
日本海軍による奇襲攻撃によって開始

宣戦布告…ロシア：2月9日、日本：2月10日（※日本は2月6日に国交断絶の最後通牒を手渡す）

2,参謀本部の作戦計画

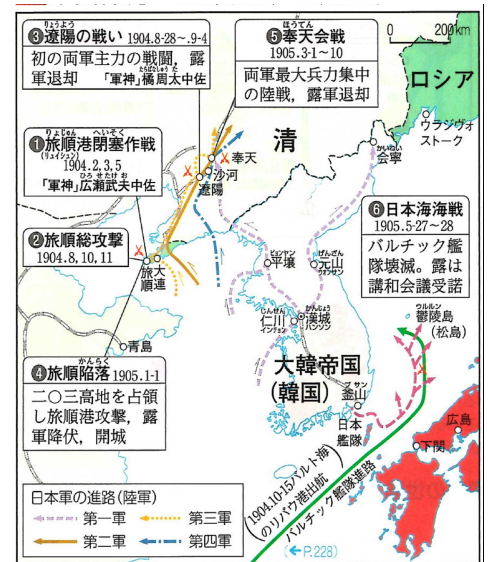
- ・シベリア鉄道が全面開通せずロシアが兵力不足のうちに
- ・可能な限りの大軍を満州南部に送り込み
- ・できるだけ早く決戦にもちこみ、圧倒的な勝利を得て、
- ・外交ルートにより早期講和に持ち込む
- ・前提としての、兵員・物資の輸送ルート、海上権の確保

4,緒戦における経過

- ・第一軍 朝鮮半島に上陸⇒半島を縦断、5/1鴨緑江渡河⇒南満州平原へ
- ・第二軍 5/5～遼東半島南岸に上陸⇒旅順へ補給路を切断⇒南満州平原に進出
- ・第三軍 5/27 第二軍の二個師団などで編成⇒旅順攻略戦
- ・第四軍 6/30編成 南満州平原に進出

5,作戦計画との齟齬

- ①二方面作戦＝南満州平原での兵力の優位はなくなる
- ②膨大な弾薬の消費＝弾薬不足による作戦遅延、⇒ドイツ流「火力主義」と機動戦は困難に
- ③旅順要塞の防衛力＝膨大な犠牲と武器弾薬などの消耗⇒日本軍主力の遅れ・＝早期決戦、圧倒的勝利、早期講和のシナリオ崩壊
- ④9月シベリア鉄道の全通⇒輸送はしだいに改善しロシア軍の量的優位が確立、数的劣勢の戦いに



III、苛酷な戦場～旅順・南満州平原（遼陽・奉天など）・対馬沖

1,日本海軍の役割～「日本は戦場に近かったのか？」

- 1)海上権死守、朝鮮海峡・黄海・日本海の制海権確保（シーレーンの確保）
- 2)旅順艦隊と、本国から来るバルチック艦隊の共同作戦を阻止する
- 3)バルチック艦隊がくるまでに旅順艦隊を無力化する（湾内封鎖作戦失敗）
- 4)やってきたバルチック艦隊を撃滅する。

2,ウラジオ艦隊(3隻の巡洋艦隊)の攪乱作戦が示すもの＝海洋国家日本の「アキレス腱」

- 1)兵員や武器弾薬等の物資を戦地に送ることができない。さらには水没死なども。
- 2)海上封鎖の危機＝貿易が途絶、兵器や原材料が届かなくなる⇒産業・生活への影響。
- 3)列島への直接攻撃の危機＝艦砲射撃、上陸作戦など。

3,旅順要塞攻略戦(04年8月～05年1月)＝第三軍(乃木希典司令官)のたたかい

- ①海軍⇒陸軍に陸上からの攻撃で旅順艦隊を追い出す。または壊滅させることを依頼
- ②旅順攻防戦…第一回(8月)第二回(10月)⇒正面突破を失敗。膨大な犠牲者。国民の非難
第三回(11～12月)二〇三高地をめぐる死闘⇒旅順艦隊の壊滅に成功⇒1月ロシア軍降伏
- ③大量の兵員と軍需物資などを失う。死傷者：6万人弱、多数の疫病患者、ロシアも同様の人数？

4,南満州平原における激闘(04年8月遼陽会戦～05年3月奉天会戦)

- ①8月末遼陽会戦から、翌年3月初の奉天会戦まで、日露双方の大軍が対峙、激戦を繰り返す。

遼陽会戦⇒沙河の戦い⇒黒溝台の戦い⇒奉天会戦 史上最大級の戦闘を継続する

- ②奉天会戦(05年3月1日～10日)日本：21万人、ロシア：30万人が参加、
 - 1)ロシア軍の撤退により奉天と周辺を占領(「惨勝」)→追撃戦は不可能に
 - 2)日本軍約7万・ロシア軍約9万の死傷・不明者(ともに損耗率28%)⇒追撃・撃滅は不可能
 - 3)前線からの講和を求める声のたかまり

5, 陸軍の優位をもたらしたもの

- ①ナショナリズム=兵士の意識の高さ、軍隊における「実力主義」、最新軍事技術の導入
 - 1)将兵の質と練度の高さ 2)電信・電話を利用した共同作戦と各部隊の連携が可能に
- ②弾薬不足と将兵の質と練度の低下(とくに中・小隊長クラス戦死)、兵力不足

6, ロシアの敗因=「ロシアは四つに組んでわれとわが身で膝をくずし土をつけた」(司馬遼太郎)

- ①有能な将校・兵士とそれ以外のばらつき、部隊間・司令官同士の連携の弱さ。
実力よりも家柄や皇帝との関係の重視=国内の矛盾を反映
- ②ロシア軍の「戦略的」撤退?
- ③士気の低下、国内の批判の高まり、国債販売の不調

7, 日本海海戦～バルチック艦隊の「悲しき大航海」

- ①ロシア、ヨーロッパ・ロシア側の艦船からなる第二太平洋艦隊を編成⇒04年10月出航
- ②バルチック艦隊の航海=半年をかけ、33,340キロの航海。
 - 1)イギリスによる執拗な妨害、同盟国フランスの非友好的対応、喜望峰経由=馴れない熱帯。
 - 2)補給・修繕・休養の困難。疫病の発生、将校と兵士の対立。⇒最悪の状態で極東に
- ③5/27～28 日本海海戦=日本海軍の完勝とバルチック艦隊壊滅

IV、世界初の近代戦争・総力戦

1, 史上初の近代戦争・ハイテク戦争

- ①1870～71年の普仏戦争以来、30数年ぶり近代国家同士の本格的な戦争
- ②重化学工業を中心とする第二次産業革命が急速に進展。兵器や軍事技術の急速な革新
- ③凄惨な「ハイテク戦争」=機銃による大量殺戮、桁違いの砲銃弾量、28センチ榴弾砲など
- ④情報機器の使用…戦場での電信電話使用=機動的な兵力運用

2, 「総力戦」=戦争の「現代化」へ=兵員と兵器の供給能力が死命を制する

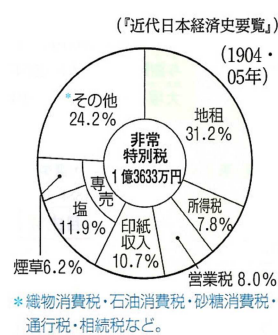
- ①行政制度の整備…徴兵と徴税を支える地方制度の整備、鉄道などの整備
- ②フル操業の軍需産業…過労死と労災事故する軍工廠、不足分は輸入にたよる
- ③マスコミ対策とナショナリズムの高揚(「露探」疑惑)

3, 膨大な戦費=総額約18億円

- ①戦争準備時における重税(十日清戦争の賠償金)
- ②増税=約五億円調達(収税の負担約2倍に)
 - 1)間接税中心=逆進性(貧困層に重い性格)
 - 2)地方税の歳入減⇒生活関連費の削減
- ③内国債=約6億円…最終的には各戸に割り振る。
- ④外国債=7億円…英・米の銀行家が応じる

戦費の調達 (単位: 万円)

| 臨時軍事費の財源(予算)内訳 | |
|----------------------|---------|
| 内債・外債 | 13億1354 |
| 一時借入金 | 1億7888 |
| 一般会計繰替 (非常特別税を含む) | 1億8900 |
| 特別会計資金繰入 | 6300 |
| 軍資献納金 | 150 |
| 雑収入 | 50 |
| 合計 | 17億4642 |



4, 外国債の発行をめぐる

- ①債権にたよらないという従来の財政方針を放棄=「借金財政」へ
- ②外債募集=高橋是清らの奔走
- ③ユダヤ系金融ネットワークの協力

5, 日本のイメージ戦略～外国債販売と密接に関連

- ①「専制国家と文明国の戦争」であることを強調、日本的価値観=「正義の国」と宣伝
- ②欧米人記者の招待…従軍を許可=開かれた戦争に、日本有利を発信
- ③ロシア不利の記事⇒同盟国フランスが外債募集を拒否⇒戦争継続が困難に
- ④「文明国」の戦争を意識、捕虜への対応などに配慮せざるを得ない

VI、ポーツマス条約

1, ロシア第一革命

- ① 1905年1月、「血の日曜日」事件⇒ロシア第一革命の発生、各地でストライキ発生
- ② 日本海海戦の敗北⇒戦争の継続困難に

2, 講和への動き

- ① 1905/5/31 政府、米大統領への講和依頼⇒米大統領の講和勧告⇒6/10日本6/12ロシア承諾
- ② 7/4 日本軍、樺太作戦開始=全土を占領
- ③ 8/10ポーツマス講和会議開催 (8/29妥協成立) ⇒9/5講和条約調印

3, 列強の動き…日本の大勝⇒軍事大国化を警戒=東アジアの安定を要望

4, ポーツマス講和会議 T.ローズヴェルト米大統領の仲介 日本：小村寿太郎、ロシア：ヴィッテ

- ① 日本側=薄氷を踏む勝利・もはや余力のないことを熟知=国民世論との認識の差
- ② ポーツマス条約

- 1) 韓国の指導監督権承認 2) 旅順・大連の租借権引き渡し 3) 長春以南の南満州鉄道敷設権
- 4) 北緯50度以南の樺太 5) 沿海州沿岸の漁業権

- ③ ロシアの正当な主張と日本側の対応⇒韓国と清国の立場尊重を要望⇒日本の拒否

5, 日比谷焼き打ち事件=講和条約反対の大国民運動

- 9月5日、「講和反対国民大会」を開催⇒群衆の暴徒化、警察署や派出所・交番などを襲撃
- ⇒「あの戦争は何であったのか」という人々の問いにどうこたえるのか？

VII、おわりに～「坂の上の風景」

1, 日露戦争の本質と結果：①朝鮮半島と「満州」の支配をめぐる戦争 ②帝国主義列強の一員に

2, 最大の結果としての「韓国」の植民地化（「韓国併合」）

- ① 開戦前の主権・中立侵害=2/6釜山・鎮海湾を占領 2/7仁川へ奇襲・陸軍上陸⇒ソウルへの進軍
- ② 日韓議定書 (2/23)、第一次日韓協約 (8/22)
⇒韓国政府・民衆へ協力を強要⇒属国扱いに
とくに早期の鉄道開通をめざし土地と民衆の労働力を徴用⇒妨害や抵抗運動の発生
- ③ 1905 ポーツマス条約
⇒第二次日韓協約を強要、韓国の外交権を奪い「保護国」とする、韓国統監をおく
- ④ 1907 ハーグ密使事件⇒高宗の退位、韓国軍の解散、第三次日韓協約=韓国の内政権を奪う
⇒抗日義兵闘争の活発化、安重根・伊藤博文を暗殺
- ⑤ 1910韓国併合=植民地化、武断政治⇒以後、三一独立運動など民族運動つづく

3, 「満州」および中国をめぐる対立

- ① 中国民族運動との対立=利権回収運動（関東州・満鉄の租借延長困難に）
- ② アメリカとの対立=「満州中立化」構想の拒否、仮想敵国としてのアメリカ

4, 日本への賞賛と帝国主義列強の一角

- ① 1) 東遊（トンズー）運動（ファンボイチャウ） 2) 青年トルコ革命
- ② 1) 1905日英同盟改訂 2) 桂タフト協定（対米） 3) 日仏協約 4) 日露協商

5, 目標を見失う日本～唐突に終わる「坂の上の雲」

<参考文献>

- 和田春樹『日露戦争 起源と開戦上・下』 伊藤之雄『山県有朋』 井口和起『日露戦争の時代』
- 原田敬一『日清・日露戦争』『戦争』の終わらせ方』『「坂の上の雲」と日本近現代史』
- 海野福寿『日清・日露戦争』 坂野潤治『近代日本の出発』 山室信一『日露戦争の時代』
- 山田朗『世界史の中の日露戦争』『日露戦争の真実』『軍備拡張の近代史』
- 司馬遼太郎『坂の上の雲』